

土木学会四国支部 『土木紀行』 No.45 室戸阿南海岸をめぐる

土木構造物を巡るドライブルート（その2）

四国土木紀行 No.32 に続いて『ドライブを楽しみながらの土木構造物巡り』の PART II をご紹介します。今回は風光明媚な室戸阿南国定公園のドライブルート（約 120km）にある3つの土木名所（?），①出羽島の石造り防波堤（牟岐町），②“カモメ橋”－穴喰橋（海陽町），③日本一の光量と光到達距離を誇る室戸岬灯台（室戸市），を紹介します。今回のルート上には四国土木紀行 No.5 で紹介しました，珍名所『町内トンネル』（海陽町）もあります。そちらもご覧下さると幸いです。

ドライブする国道 55 号は信号機が少なく，途中の牟岐以南は風光明媚な室戸阿南海岸を眺めながらのドライブになります。No.32 で紹介した銅山川ルートより，随分楽で気持ちよく運転できます。ただし阿南市福井町から美波町日和佐までは急カーブの多い山道となりますので注意が必要です。またこのルートは四国遍路のルートにもなっています。幅員の無い箇所ではお遍路さんにも気をつけて運転して下さい。それでは北から順に紹介してゆきます。

①出羽島：石積み防波堤，ミセ造り，シラタマモ

出羽島（てばじま）は，牟岐港から約 3.7km，牟岐港から連絡船「大生丸」に乗って約 15 分の沖合にあります。周囲 3.1km，面積 0.65km²，標高 76m の小さな島で人口も 160 人足らずです。しかし見るべきものはたくさんあります。そのせいか来島者は 6500 人/年（釣人含む）にも上ります。ここでは石積み防波堤や国の天然記念物に指定されているシラタマモ等を紹介します。

出羽島の歴史を少し紹介します。寛政 12 年(1800 年)の「出羽島・大島住居人諸役免許覚書」（牟岐の青木家文書）によりますと，諸役・年貢免除，漁船と漁具の貸与などの



写真1 石造りの防波堤（大波止）



写真2 石造りの防波堤（対岸に白く見えているのは牟岐町市街地）

好条件を付けて出羽島に人々を移住させた記録があります。出羽島の東に大島がありますが、この大島には番所と狼煙場が設けられ、弘化3年(1846年)に漁民移住が藩の政策として始められました。出羽島同様の優遇措置により移住者を募り移住させて開墾させたそうですが、こちらは明治30年(1897年)には全島離島して古牟岐に移住し、現在無人島になっています。

さて、連絡船で出羽島を訪問すると、出羽港口で「石積み防波堤」が迎えてくれます(写真1, 写真2)。この石積みの“大波止”は、明治4年頃に官と住民が費用を折半して築造したもので、現在でも最も重要な防波堤としての役割を果たしていると同時に、歴史的・景観的にも重要な建造物として評価されているそうです。港内にある新町に沿った防波堤は延長540mで、石樹竹により根固めされており、明治初年に築造されたものと推定されています。昔の土木構造物について調べると、費用は全額公費でないという事例が多いことに驚きます。今の私たちは、防波堤にしても道路にしても社会資本は国や県が全て“してくれる”のを当然のように考えています(もちろん公費のもとには私たちの血税ですけれども)。歴史の中で今は特殊な時代なのかもしれないと思えます。出羽島の対岸にあたる海陽町浅川港には鉄筋コンクリート製の最新式の「津波防波堤」があります。見比べながら社会資本の費用のあり方について考えてみるのも面白いかもしれません。

防災といえば、出羽島には津波避難用「タスカルタワー」があります(写真3)。ネーミングについての意見は多々あろうかと思いますが、この種の避難施設は出羽島だけでなく、国道55号沿いの多くの町で見ることが出来ます(例えば牟岐町内では小学校の北にあります)。

島内の住宅を見ていて非常に面白いと思ったのは「ミセ造り(蔀帳)」の雨戸(写真4, 写真5)です。この雨戸は上下に開けるようになっていて、下におろした雨戸は足をつけて縁台になるという変わった構造をしています。雨戸を閉めた様子が写真4、開けた様子が写真5に



写真3 タスカルタワー



写真4 「ミセ造り(蔀帳)」の雨戸



写真5 「ミセ造り(蔀帳)」の雨戸

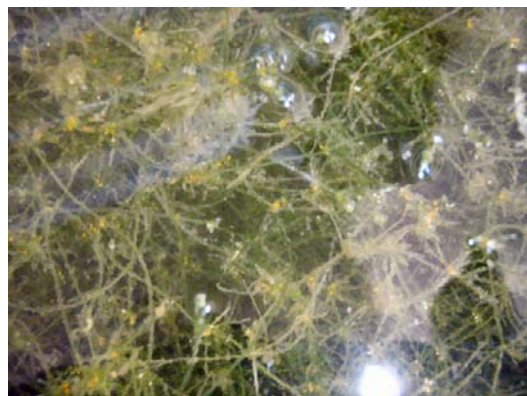


写真6 シラタマモ

なります。

小さい島ながら見るべきものが多い出羽島ですが、この島が知る人ぞ知る島である理由は、土木構造物ではなく、天然記念物「シラタマモ」(生物が海から陸へと移行する際の形質を持った貴重な海藻で1億4千年前に繁殖)の自生地となっている大池があることです(写真6～写真8)。生きた化石と呼ばれるシラタマモの自生地は日本では2004年に見つかった美波町のほか、インド洋モーリシャス島、南太平洋のニューカレドニア島、北アフリカのリビア海岸などしかありません。出羽島・大池のシラタマモは1972年に国の天然記念物に指定されました。大池にあるシラタマモは近づいて見ることは難しいですが、観察用の水槽が、出羽島港の船着き場近くにある漁村センター入口に展示されています(写真6)。

②海陽町：復活が期待される“カモメ橋”－宍喰橋

徳島県最南端の町、海陽町には珍しい土木構造物が少なくありません。中でも「町内トンネル」と並ぶ存在が「宍喰橋」です(写真9, 写真10)。2連アーチを“カモメ”に見立てて、“カモメ橋”と呼ばせる橋はたくさんあっても、コンクリート・アーチを白色塗装し、さらにFRP製の頭まで付けて本当に“カモメ橋”にしたのは、世界でも恐らくこの宍喰橋だけでしょう。この事件が起こったのは1992年ですから、ちょうどバブル経済期にあたります。財政事情の厳しい今ならとてもこのような作事はできません。ある意味、日本の夢の時代を色濃く伝える土木遺産と言えると思います。同じ時代の珍橋としては、和歌山県印南町の“かえる橋”(1995年完成)があります。土木構造物にとってバブル期はどのような時代だったのでしょか。

残念ながら“カモメ橋”は平成20年から実施されている改修工事で“カモメ”の頭が撤去されています。復活する予定はないらしいとの話も伺っていて非常に残念です。個人的にはこういう遊び心(本来の目的と安全性に問題がない程度の)は大切にしたいなあと思います。



写真7 大池のシラタマモ



写真8 大池のシラタマモ(説明板)



写真9 在りし日のカモメ橋(2007年6月)



写真10 カモメは復活するか?

③室戸市：日本一の室戸岬灯台

ドライブの終着点は、光量（160万カンデラ）、光到達度（26海里、約48km）ともに日本一を誇る室戸岬灯台です（写真11～写真14）。この灯台は日本に6箇所（千葉県・犬吠埼、京都府・経ヶ岬、島根県・出雲日御碕、高知県・室戸岬、山口県・角島、福岡県・沖ノ島）しかない、レンズ直径2.59mを使用した第1等灯台で、通常のレンズを同心円状の領域に分割し、厚みを減らした軽量のフレネル式レンズを採用しています。

室戸岬灯台はその歴史的価値からAランクの保存灯台ともされています。さらに「日本の灯台50選」の1つにもなっていますが、四国の灯台では、他に男木島灯台（香川県）、足摺岬灯台（高知県）、佐田岬灯台（愛媛県）があるだけです（最東端の蒲生田岬灯台（徳島県）は選外）。よく「むろとみさきとうだい」と呼ばれますが、「むろと“ごき”とうだい」が正しいようです。回転灯を真横から見ることのできる貴重な灯台（写真12）で、フレネル式レンズの構造もよく分かります（写真13）。

この灯台はドライブの終着点として、是非夕暮れ時に訪問して欲しい所です。岬付近には国道沿いに幾つか駐車場がありますが、国道を走りながら、あるいは駐車場から灯台を眺めることはできません。灯台は岬まで続く尾垂山の峰端上（標高154.7m）にあります（写真11）。灯台を見るには、岬の西側（室戸市街地側）まで車を進め、県道203号を登り、四国88箇所23番札所の最御崎寺の駐車場に車を停めて、灯台まで歩きます。取材時はちょうどタイミング良く回転灯が動き出しました（2010年1月22日、17:40頃）。その様子を収めた動画もご紹介します（四国土木紀行のメニューにリンクがあります。QuickTime形式で10MB程度です）。

写真14にありますように、室戸岬から眺める夕焼けは非常に綺麗で時間を忘れます。写真の中に宵の明星（金星）が写っていますが、分かりますか？

参考文献：牟岐町史

徳島大学大学院 教員 田村隆雄



写真11 室戸岬(灌頂ヶ浜)から望む室戸岬灯台(赤丸)と中岡慎太郎像(黄丸)



写真12 夕暮れ時の灯台



写真13 フレネル式レンズ

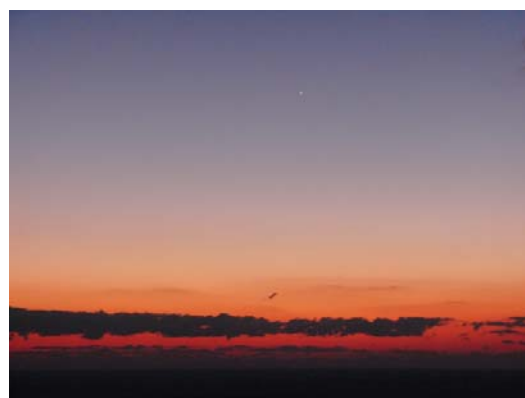


写真14 室戸岬の夕景と宵の明星（金星）